

[シンポジウム5]

女性看護師の初穂

—壬生養生局からトレインドナース大関和—

加藤 光寶

前獨協医科大学看護学部長

看護の仕事は、「看護人」である男性によってなされていた。女性看護師の発祥は、戊辰戦争の時である。戊辰戦争とは、慶応4年1月3日から6日に及んだ鳥羽伏見の戦いから、明治2年五稜郭の戦い終結までの内戦である。

戊辰戦争時に、女性が看護に携わったと言われているのは、京都相国寺内野戦病院、土佐藩大阪屋敷野戦病院での妻女等による負傷者の手当、会津藩藩主の姉である照姫らによる看護が知られている。戦場には、藩医2~3名、男性看護人4~5人が従軍していた。

下野新聞2007年4月3日の記事に「女性看護人国内初は壬生」、「銃創看護人として、此の地の婦人9人雇い入れ養生局へ差し置ける」とある。この「銃創看護人」「雇い入れ」「養生局に差し置く」ことになった安塚の戦いにおいて、一時的であれ、看護を仕事とする目的で養生局に雇われたということが、前衛の女性によってなされた看護とは異なる女性看護人の初穂といえよう。

慶応4年4月22、23日の両日、宇都宮城に向かう官軍は、その途中の安塚で、旧幕府軍と戦い、多くの負傷者・死者がでた。戦いの翌日24日に養生局に看護人を雇い入れる必要があったという事になる。戊辰戦争当時、近代的設備を整えた「横浜軍陣病院」が開設されたのは、慶応4年閏4月17日である。壬生の養生局の女性看護人が、銃創看護にあたったのは、これに、およそ1ヶ月先んじて、日本初ということになる。

ところで、戊辰戦争時の看護については、唯一の記録と言われる「日本陸軍病院記録」から看護の状況をうかがい知ることができる。この記録は、横浜軍陣病院が、神田泉橋の旧大名屋敷藤堂邸に移るまでの記録であり、「大病院日記」あるいは、治療に当たっていた英国人医師の名前から「シドルの日記」とも言われている。横浜軍陣病院においては、戦場から送られた負傷者が戦場での不穏を引きずり、さらに、その狼藉ぶりに対して、試みに女性看護人を採用した。「柔よく剛を制」し、負傷者は常軌を取り戻し、治療環境が整ったと書かれている。看護の状況については、この記録からうかがい知ることができる。壬生養生局での看護の状況も、規模の大小はあれ、これに近いものであったと思われる。後に、看病婦規則（内務省令第9号）の制定に尽力し、順天堂病院の総婦長として活躍した杉本兼は、この当時の看護にあたった1人である。

官立初の看護教育は、医科大学第一医院において明治20年に始められた。亀山によれば「看護師とは、系統的組織的に教育訓練された看護師をさす」という。この教育を受けてトレインドナースと言われている代表は、大関和である。大関は、黒羽藩家老大関弾右衛門増虎の娘である。安政5年に生まれ、桜井女学校（女子学院の前身）に看護を学び、続いて医科大学第一医院看病法講習科でナイチンゲール学校を卒業した英国人アグネス・ベッチェの教育を受けたトレインドナースである。

黒羽が輩出した近代看護の先駆者大関は、昭和7年5月22日に74才の生涯を閉じるまで今日的にいう看護の地図を描く臨床看護、訪問看護、地域看護、助産、感染看護、看護教育など、その先鞭を自らの実践によって今日にメッセージしている。